

二〇一四年五月二十日掲載

輸送経済新聞

第一貨物

第一貨物（本社・山形市、武藤幸規社長）は、積載率向上や運行時間短縮を図る上で、東名高速―圏央道―東北道ルートの開通に大きな期待を寄せる。一名阪地区から東北北三県（青森・秋田・岩手）へ三日目午前中配達する荷物を、圏央道沿線でいったん集約し運行便を満載にして走らせることが可能になる（鈴木真人常務営業副本部長）。

同社は近年、圏央道の建設状況や沿線に進出する顧客の動向に対応しつつ、特積み機能と倉庫機能を併せ持つ厚木支店（神奈川県愛川町）、入

間支店（埼玉県入間市）、大宮支店（さいたま市）を相次ぎ稼働。今秋をめどに千葉支店もリニューアルオープンする。

構想は十年ほど前からあった。都心を通らず東北―中部

高速がつながり、東北から来て、あるいは関東から東名を使うルートの一部で運転時間短縮のメリットがあった。

相模原愛川IC間の開通。改善の一例が名阪地区発東北向けの便。東北北三県に出す荷物は現在、小規模な事業所からも直行便を運行。各店からの荷量が限られるため複数の店所へ立ち寄るなどの必

品質と効率、両立可能に

東北北3県へ集約便も

・関西圏を行き来できれば運行の在り方は大きく変わる。

30分早く到着

荷役が行える

「すでに効果を感じている」と鈴木常務。「圏央道と東名

十分程度到着が早まり、ドライバーが積み降ろし作業をする余裕が生まれた。

要がある。同区間が開通すれば、こうした問題が解消される」とみる。

さらに期待するのが、東名―東北道間を結ぶ白岡葛蒲インターチェンジ（IIIC）―

リードタイム

維持し合理化

桶川北本IC間、高尾山IC

「北三県などへの荷物を圏



央道沿線で集約したい」（鈴木常務）。名阪地区からの便を直行させず厚木、入間、大宮のいずれかの支店で関東発の荷物とドッキング。満載便を

おとし開設した大宮支店。旧・足立、岩槻の二支店を統合し集配エリアを広げた

仕立てて走らせれば、積載率や運行の組み立ての点で大きな改善が図れる。厚木や入間で途中丸一日荷物を留め置くことになるが、現行通り三日目午前中に配達できる。

名阪地区から東北北三県への直行便は、将来的に荷量の豊富な大規模事業所に限定する考え。「運行便の改善で相当のコスト削減も見込める」（同）といい、リードタイムの維持・向上を目指しながら合理化を進めるさまざまな方法を検討中だ。

（矢田 健一郎）